



亀井神道流 西日本吟詠会総本部 広報部
題字：波多江啓峰

吟友



新緑の秋月城趾

亀井神道流の源流

亀井神道流の流祖 吉村半之丞第一世宗家(吟号、東陽)は、黒田家支藩5万石の藩士に繋がる出自です。父元紹は、秋月藩校教授、原古処に師事し漢詩と吟詠を学びました。

原古処は、福岡藩学問所甘棠館において黒田藩儒亀井南冥、昭陽父子の門下生として学問と亀井流吟詠を学びました。

吉村宗家は、幼少時より父から剣道と吟詠の指導を受け、めきめきと上達しました。特に吟詠の上達は目覚ましく十九歳にして優れた指導者として認められました。

福岡県庁に奉職してからは、勤務の傍ら、吟道の普及に尽力し、県内及び九州各地をはじめ全国的に普及の場を拡げました。

昭和四年には、頭山満翁を顧問に迎え、西日本吟詠会の前身、西日本吟道会を開設し、吟詠活動を本格化しました。

吟界の草分けとして、吟詠全盛時代の指導者としての立場を確立すると共に、亀井父子ゆかりの吟風を引き継ぎ、亀井神道流を創流しました。

吉村宗家が生まれ育った甘木・朝倉の秋月こそが、亀井神道流の故郷であり、甥で第二世宗家の故廣澤尚陽師の故郷でもあります。

秋月城址を訪ねるに当たり、秋月藩儒、原古処の長女、原采蘋をご紹介しましょう。

采蘋は、江馬細香・梁川紅蘭・亀井少葉と共に当時としては数少ない女流漢詩人でした。

父の遺志を継いで生涯を漢詩の追究に捧げました。その性格は豪放磊落、酒に強く、北は関東から南は鹿児島まで漂泊を重ね、当代一流の知識人と交流して詩文を磨き、名を馳せました。友人宅からの帰路、心の趣くままに酒豪らしく「花下醉歌」と題して、次の詩を賦しています。

桃杏已に開き 李も亦芳し

千鐘 尽き 風光を負う

飄然として 一たび 酔えば 帰路を忘れ

花底 朦朧として 春月 香る

辺塞詩の吟詠

師範 前田 学陽

中国は、紀元前二二二年、秦の始皇帝によって天下統一されたが、その後も異民族との闘争が続いていた。万里の長城は異民族の侵入を防ぐに必要な塞(せ)でもあり、長城の築造及び防塞の兵士として、異郷の地へ多くの兵士達が派遣された。詩人達は、辺境の地、塞に赴き兵士達の嘆きを詠う。それが辺塞詩です。

有名な詩人、杜甫は戦乱の中で捕捉され幽閉の身の上で代表作「春望」國破れて山河あり、「家書」万全に抵たる。家族からの便りも届き難い望郷の気持を詠う。

王之涣「涼州詞、羌笛何ぞ須いん、楊柳を怨むを」悲哀の表現。また王翰は「涼州詞」葡萄の美酒、夜光の杯」飲む葡萄酒は中国ではない西方からの珍しい産物で辺境の地として表現。酔いしれる兵士の姿を「酔うて沙場に臥す、君笑うこと莫れ、古来征戦、幾人か回る」。吟士はこれらの代表作叙事詩「韻文」を特に辺塞詩の哀愁、望郷の思いを吟詠で、どの様に表現すればと工夫を重ねる所です。

メダカの飼育と癒やし

宗師範 田中 観陽

メダカとの出会いはそんなに古くはありません。近くの居住者から5〜6匹のメダカを貰い、近くの専門店で購入して、近頃の専門店で育て方などを研究し毎日、可愛がっています。

特に暑さ寒さの対策に注意し、水の入れ替えと、水草を専門店より買い、水槽に入れて飼育していると、初夏の五〜六月頃、3ミリ〜5ミリ程の赤ちゃんが、70〜80匹生まれました。これが大変で、親が子メダカを追いかけまわすので、別の水槽に子供だけを入れました。

これからは、更に大変！子メダカは温度管理が大変で、水槽の温度が15度以下になると、胃がないので死にいたるようです。屋外飼育の注意点は、いくつかあります。冬対策として、温度には注意して寒くならないように、透明なビニールなどで暖かくして上げる等。

メダカの飼育も奥が深く、驚くばかりです。メダカの情報を調べた所、値段の高いメダカは、岐阜県の斉藤道三で有名な「道三メダカ」がトップです。

最高値の品種は、3匹で70万円もするそうで、ビックリします。これからも、もっと勉強して、大事に育てて行きたいと思えます。

ボランテア25周年で「祝吟」披露

師範代 鳥飼 公陽

桜咲く、去る三月二十八日、博多サンヒルズホテルに於いて「傾聴」ボランテア二十五周年記念で、本会準師範矢野重陽先生と共に「祝吟」を披露し、沢山の拍手を頂戴しました。「祝賀会」に相応しい吟詠で会が引き締まって良かったね」と多くのお褒めの言葉を頂き、今日までご指導下さった村笹陽先生をはじめ諸先生に感謝しています。



吟詠中の鳥飼(左)・矢野先生

俳句投稿

太宰府仁陽会 古賀 詩川

朱の橋も 宮も隠して

樟若葉

幟武者 宝満山の

太刀かざし

はじめての

あんよの出来し 子の五月

短歌投稿

岩戸扇陽会 久我 節峰

田植えの頃

水張田に蛙の鳴けば百姓の血が湧き立つと今も夫の嫁ぎ来て田植えこなせし母のこと

乏しき暮らしも酒の話題に

機械持つ農家頼みの田植え終ゆ

地下足袋一つ洗う事無く

田植え済み一家に囲む昼餉時

孫の仕掛くるシリトリはてさて

田を売って船員学校出してくれし

父を心に夫のいきおり

にぎやかな雀に詩吟の声を張る

里の平和を守りてゆかばや

働かず生きゆく日々を仏前に

供つる賞状詩吟奨励賞

ニコニコBOX 浄財ありがとうございました

三月三十日現在(順不同・敬称略)

- 古澤 奏陽・中島 光陽
諫山 星陽・橋口 康陽
松嶋 蓮陽・植崎 忠陽
久保山孝陽・森田 綾陽
平山 恵陽・池田 慧陽
小松 扇陽・前田 学陽
田中 観陽・八尋 征陽
後藤 佳陽・山口 皇陽
近藤 晴陽・武内 史陽

よつこそ 西日本吟詠会へ

- 船木 燦陽・郷原 竹陽
肥塚 景陽・高山 富陽
河原田和陽・溝口 静峰
古賀 西陽・小野 律峰
有岡 絃陽・今村 利月
吉弘 翔陽・首藤 伸峰
梁池 梁陽・古賀 箱峰
石村 笙陽・田中 五月
田中 了陽・桃山流みやこ舞
本田 雅陽・桃山 玉舟
山田 啓陽・事業部
池田・久保山

- ◆香椎了陽会 花本 博文
◆雅陽 会 松本 弘月
◆太宰府勝陽会 甲原 美恵

編集後記

三月は日曜日ごとにコンクールがあり、皆さん大変な思いをされた事でしょう。私共も写真撮影、原稿書きで大忙しでした。

広報部員

- 広報部長 船木 燦陽
部長代行 山口 皇陽
副部長 船木 涼陽
部員 林谷 典陽

発行所 亀井神道流西日本吟詠会事務局 那珂川市道善三六 渡邊昇陽方 印刷所 井上紙工印刷機



亀井神道流 宗家
西日本吟詠会 会長

諫山

岳陽

令和6年は、元旦早々北陸能登半島の大地震で新年を迎えました。震災後5ヶ月を経過しましたが、復興、復旧未だ道半ばで、被災された方々には誠にお気の毒で、心からお見舞い申し上げます。

会員及び後援会員の皆様におかれましては、その後益々ご壮健にてお過ごしのことと拝察いたします。

ついこの前、新年号で新春のご挨拶を申し上げたと思っていたのに、周囲はもうすっかり新緑に囲まれていて、季節の移り変わりの速さと月日の経過のスピードに、改めて驚いています。

新年号では、山口の三戸喜義先生に「登り龍」の水墨画を描いて頂き、元気よくスタートを切ることが出来ました。お陰様で、本会も幸先よく吟春を迎えることができ、会員の皆様のご活躍ぶりが報告されていて誠に同慶に堪えません。過日の毎日吟士権大会をはじめ各吟詠大会における本会会員の和歌部門での活躍には目を瞠るものがあります。毎日吟士権で和歌部門が設けられた平成5年に先駆けること3年前に

和歌朗詠大会を開催してこの6月2日で第35回目の大会を開催致します。詩吟と和歌は車の両輪として共に習熟してまいりましたがその成果が顕れたものと評価しています。

これも偏にいくつもの「登竜門」にチャレンジされている会員及び指導者の皆様の旺盛な向上心の賜と改めて心から敬意と感謝の意を表します。今更ながら「2回の舞台は百回の練習に勝る」の言葉通り実行されている証と申せましょう。

さて、もう一度「登竜門」の由来について述べてみましょう。語源は、「後漢書」李膺伝で語られた故事に由来するそうです。昔、黄河の中流地域「函谷関」の上流、靈山に龍門という滝があり、激流で普通の魚は上ることが出来ず、そこを登りきれた魚は靈力が宿り変じて龍になると言われています。

この伝説になぞらえて、難関を突破して立身することを「龍門に登る」「登龍門」というようになりました。日本では、江戸時代に、子供の成長と出世を願い各家で「鯉のぼり」を

立てるようになりました。

皆様も豊かな吟詠表現力向上の為に、各種の「吟界の登龍門」に挑戦されることを大いに期待しています。

本会は、今秋創立95周年を迎えるに当たり、記念祝賀吟詠大会を開催すべく準備中です。一人でも多くの会員の皆様と共に計時を祝いたいと考えています。後援会員の皆様にもご支援とご協力をお願いすると思いますがその節はよろしくお願ひ申し上げます。

私事ですが、昨年自動車運転免許証を返納致しました。実は、五年前(令和元年)の「吟友」71号の「初秋所感」で、自虐的に「十八歳と八十一歳の違い」に触れて「運転免許を取るのが18歳、免許証返還を勧められるのが81歳」と書きましたが、正にその通り81歳で家族全員から返還を勧められ、ついに返納となった次第です。我が家も一番下の孫娘が18歳です。

ついでに、71号に載せなかった川柳「18歳と81歳の違い」をご紹介します。一つでも思い当たる方と身につきまされる方は、多分まだ大丈夫です。

① 恋で胸を詰まらせる18歳、餅で喉を詰まらせる81歳。
② 心がもろいのが18歳、骨がもろいのが81歳。

③ まだ何も知らないのが18歳、もう何も覚えていないのが81歳。
④ 筋肉が張るのが18歳、筋肉に貼るのが81歳。

⑤ 緊張で震えるのが18歳、何も無いのに震えるのが81歳。

⑥ 偏差値が気になるのが18歳、血糖値が気になるのが81歳。

⑦ 衣裳も化粧も薄いのが18歳、面まで厚いのが81歳。

⑧ 金も時間もない18歳、金も時間も使えない81歳。

⑨ 行く先が見えないのが18歳、逝く先が見えるのが81歳。

⑩ 胸がドキドキときめくのが18歳、胸がドキドキ心配なのが81歳。

⑪ 聞く気がないのが18歳、聞こえないのが81歳。

⑫ 乾杯が始まるのが18歳、黙祷で始まるのが81歳。

⑬ 検問に引っかかるのが18歳、オレオレ詐欺に引っかかるのが81歳。

⑭ 親の支えがいるのが18歳、杖の支えがいるのが81歳。

⑮ 友達が増えるのが18歳、友達が減るのが81歳。

⑯ 「嵐」というと松本潤を思い出すのが18歳、嵐寛寿郎を思い出すのが81歳。



副会長 諫山 星陽

去る三月三日(日)第六十回「曲水の宴」が太宰府天満宮曲水の庭で斉行された。

今年はコロナウィルス禍が下火になり、観覧席も設けられ大勢の観客が、平安絵巻に魅了された。

平安時代の宮中行事を再現した雅な神事、鮮やかな十二単や、衣冠装束をまとった十三人が詠み人として参宴し、いにしえ人を偲びました。曲水の宴は、古代中国でけがれをはらう儀式として始まったとされています。

今回は福岡県知事、服部諫太郎様が詠み人として参宴され、素晴らしい和歌が披露された。

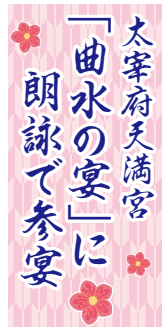
「筑紫野に飛びまいりける
梅の花

四方の国へと

香り伝えん」



古澤奏陽副会長が朗々と詠じた。今年の朗詠者は古澤奏陽副会長、小松扇陽宗師範、池田慧陽師範、八尋征陽師範が大役を果たした。



宗伝副会長 古澤 奏陽

去る三月三日(日)太宰府天満宮主催「神事」第六十回曲水の宴が斉行されました。

十数年振りに参宴させていただき身に余る光栄でした。曲水の庭で、修祓の儀、神楽舞、飛梅の舞、白拍子の舞が披露され、とても感動しました。和歌朗詠の時間が近づくこと心地よい緊張感に包まれました。

宗家諫山先生、星陽先生の教えを守り作者の気持を大切に



古澤奏陽宗伝副会長

に詠じました。宗家先生、星陽先生にただただ感謝でございます。命の続く限り吟道に精進してまいりたいと思います。



宗師範 小松 扇陽

太宰府天満宮に於いて、平安時代の宮中行事を再現した「曲水の宴」が、例年のごとく開かれました。

福岡県知事、県の新善大使、県の企業者十三名の方々が、衣冠や十二単などに身をまとい、小川に浮かべた酒杯が自分の前を通り過ぎる迄に和歌を詠み、短冊にしたため、杯を飲み干し、その短冊の和歌を私達に朗詠させて頂きました。

例年より今年は寒い日でしたが、梅の花と、雅かな中にも



小松扇陽宗師範

おごそかに時の流れを頂きました。再参の宴ありがとうございます。ありがとうございました。



師範 池田 慧陽

曲水の宴に、初参宴させていただきました。

平安王朝絵巻が再現され十二単、衣冠束帯の参宴者の方々が詠まれた和歌を、筆の音のひびく中、可愛い稚児さんから短冊を受けとり、心を込めて朗詠させて頂きました。この様な優雅な「宴」に参加させて頂きましたことは、私の人生の中で最も光栄なことであり、これからも精進させて頂く為の大きな糧となりました。心から感謝申し上げます。

星陽先生、古澤先生にはいろいろお気遣いいただきご指導いただきました。

当日は、小松先生が優しく見守って下さり、感謝申し上げます。

未熟な私ですが、一歩一歩吟を精進してまいりたいと

思っております。宗家先生、諸先生の皆様、よろしく御指導の程お願い申し上げます。



池田慧陽師範

師範 八尋 征陽

三月三日六十回の宴に参加させて頂きました。

午前中少し雪が舞いましたが昼から薄日がさし、ほっとしました。

昼すぎから神苑に入り、白拍子や巫女の舞などの神事が始まりました。

「盃の儀」の時に服部県知事、福岡親善大使、女性アンウンサー等招待された十三人の詠み人がよまれた詩歌を、四人で交互に朗詠させていただきました。緊張と寒さで声が出るか心配でしたが、マイクに助けられて詠ずることが出来ました。



朗詠者左より八尋師範、古澤副会長、小松宗師範、池田師範



八尋征陽師範

三首歌い終えた時、ほっとしたのと同時に清すがしい気持ちになれた事をおぼえています。
本当に貴重な体験でした。このような機会を与えて下さった宗家会長、熱心にご指導いただきました星陽先生、先輩の先生方に感謝致します。
ありがとうございました。



太宰府天満宮 第六十回『曲水の宴』参宴記念 令和6年3月3日

支部長代表者会報告

副会長 宗伝 諫山 星陽

令和六年度太宰府天満宮 崇敬会「支部長代表者会」が去る四月二十五日(木)に開催されました。

今回は、宗家が勤める西日本吟詠会支部長の代理として参加しました。

毎年同時期に実施されている大切な会議ですが、今回は、改修中の御本殿素屋根の拝観会が企画されました。

会議に先立ち、午前十一時から仮殿に於いて「月次祭の神事が斉行されました。

支部長代表者会では、崇敬会担当より、崇敬会の現状報告に続き、令和五年度事業報告及び令和六年度事業計画が発表されました。

終了後、コロナの影響で中止されていた「直会」も開催され、久々の歓談タイムとなりました。

最後に支部強化活動費が配布され、支部長代表者会の予定を無事終了しました。

(西日本吟詠会支部世話人)



語人声吟

永い間、自然に感じていた、春夏秋冬の季節感も、このところの地球温暖化の影響で、少々ズレを生じているようです。

良い例が、梅や桜のように春の訪れを感じていた花々の開花時期が、例年と様変わりしたようです。

▼太宰府天満宮曲水の宴の梅花や地元福岡の桜花の開花と満開の時期が、微妙に違っていたと感じた方も多かったことでしょうか。

▼菜種梅雨とも重なり、満開と同時に降った花散らしの雨は、折角の花見の邪魔をしたようです。

毎年思いつくのは、頼鴨匡作の七言絶句「春簾雨窓」の起句「春は自ら往来して人は送迎す」の一節です。

特に転句の「花を落すの雨は是れ花を催すの雨」の句は、自然の営みの機微と感謝の思いが込められている名句です。

▼木々の葉々が新旧入れ代わるこの季節、人々の営みも送迎が行われ、別れや新しい出会いが始まります。(岳)

毎日吟士権大会開催

合吟五人の部で準吟士権獲得 三人の部でも準吟士権

毎日新聞社主催第四十六回毎日吟士権大会福岡予選大会が、去る三月二十三日(土)二十四日(日)の二日間、太宰府市の「プラム・カルコア太宰府」で開催された。



競吟上の注意の諫山岳陽常任審査員



開会の言葉の山中鈴鶯先生



第一日は、野村聡陽先生の総合司会のもと、大会常務委員の山中鈴鶯先生の開会の言葉で幕を開け、諫山岳陽常任審査員が競吟上の注意を述べ、早速、幼少年の部・中高生の部合吟三人の部と五人の部・和歌の部一般の三部が開かれた。

合吟五人の部では、本会の古賀誠・吉弘勝幸・榑崎忠吾・前田和宏・山口和洋チームが、



合吟三人の部準吟士権
松嶋蓮陽・久保山孝陽・平山恵陽 各宗師範

堂々とした吟詠を発表し、準吟士権を獲得した。又三人の部でも、松嶋蓮陽・久保山孝陽・平山エミ子チームが、準吟士権を獲得した。



合吟三位
武内史陽・大田心陽・大神靖陽 各先生



1日目講評中の山中梅鈴先生

当日行われた和歌の部では十五人が入賞し、一般の三部では二人が入賞した。

二日目でも 多数入賞

翌三月二十四日(日)には、司会を坂口鶯壽先生が務め、高齢者の三部・高齢者の二部・高齢者の一部が実施された。熱吟終了後の閉会行事では、恒例の講評を山中梅鈴先生がユーモアたっぷりに行った。審査発表は、城井副部長が行い、富永岳誠審査員の閉会の辞で無事終了した。



成績発表 城井謙治大会委員長

◎第十位 八尋征子・林谷典子・柴田美津子

◆合吟三人の部

◎奨励賞

古賀博子・藤波純子・郷原菊代

◆合吟五人の部

◎奨励賞

上野春香・榑原美智子・佐々木明子・中野勝恵・野村マリ子

◆和歌の部

◎入賞

林谷典子・吉弘勝幸・恵内隆・山口和洋・野村マリ子・河原田和子・田中了子・白石美恵子・柴田美津子・梁池美和子・松嶋紀代子・森本賢策・池田智恵子・榑崎忠吾・折居英理子・榑原美智子

◎奨励賞

久我節子・香月美穂・柴田廣隆・山内千鶴・古賀誠・中島慶子・森田睦子・山田豊子・森和教・鳥飼公江・城一枝

◆一般の三部

◎入賞

中内千鶴・森田睦子

◎奨励賞

倉内恵子・恵内隆

◆一般の一部

◎入賞

野田清雅

◆合吟三人の部
◎準吟士権 松嶋紀代子・久保山孝子・平山エミ子
◎第三位 武内チズヨ・大田好子・大神澄代
◎第六位 船木久美子・山田豊子・船木礼以
◎第七位 吉弘翔陽・榑崎忠陽・森和教



1日目閉会の言葉を述べる
富永岳誠先生

◆高年齢者の三部
◎入賞

船木久美子・樫崎忠吾・野村マリ子・橋口満智代・松嶋紀代子・山口健二・森和教

◎奨励賞

田中五月・白石眞一・江藤利幸・近藤晴子・鳥飼公江・中島昭代・山田豊子・加藤賢子

◆高年齢者の二部
◎入賞

稲毛幸栄・山口和洋・池田智恵子・竹内由美恵・森本賢策

◎奨励賞

久我節子・本田鈴子・土屋綾子・武内チズヨ・吉弘勝幸・古賀博子・蒲池恵子

◆高年齢者の一部
◎入賞

河原田和子・梁池美和子・久保山孝子

◎奨励賞

大田好子・田中了子・小野律子・上野春香・福山博・石橋忠夫

三日目
北九州予選
杉谷玲峰さんが入賞

◆高年齢者の一部

◎入賞 杉谷玲子

(香椎了陽会)

◆和歌の部

◎奨励賞 杉谷玲子(同)



閉会の言葉の宮西宏岳先生



2日目講評の亀谷鶯風審査員



河津会長の剣舞



御挨拶中の河津義政会長

第九回八葉会

剣詩舞同志八葉会総本部
(河津義政会長)主催、第九回八葉会発表が、去る三月二十一日(日)プラム・カルコア太宰府大ホールで開催された。加盟剣詩舞会に加え、各友好吟詠会の会員が、地吟者として多数参加した。



地吟 本田雅陽先生



地吟 加藤督陽先生

本会からは、吟士として古澤奏陽副会長はじめ、田中観陽、有岡絃陽、吉弘翔陽、野村真陽、加藤督陽、本田雅陽、森田綾陽、山口皇陽、恵内隆陽、中尾映陽の十三名。剣士・舞人として前田学陽、山口義真さんの二名が出場。

その後、四階の多目的ホールに場所を移して打上会が行なわれ、ビールで乾杯！
和やかな雰囲気の中で無事、盛会裡に終了した。



伴奏 原國龍先生・原タカ子先生

伴奏は、尺八・都山流師範原國龍先生。琴・生田流師範原タカ子先生にて、四十九番まで約三時間滞りなく演奏された。



詩舞

又、剣詩舞会の将来を担う幼少年、青年も多数出場し、大会を盛り上げた。

春季大会

(第一部) (第二部) 開催

西日本吟詠会総本部主催
第六十二回春季吟詠大会が三
月十七日(日)プラム・カルコア
太宰府多目的ホールで開催さ
れた。



筑前今様 古澤奏陽大会副本部長



開会のことば 高木仁陽大会本部長



諫山大会会長挨拶

これに先がけて春季大会一
部が開催され、入賞者が第二
部に参加した。
尚、高齢者には特別奨励賞、
新人奨励賞が授与された。

大会会長挨拶の中で諫山会
長は、「本大会は今年で六十一
回目を迎えます。実に半世紀
以上に亘り継続し現在も吟
界で活躍中の優秀な吟士を輩
出した登龍門として高く評価
されています。今年はコロナや
インフルエンザ流行の影響で、
長年続けてきた二部制の大会
を合同で実施することになり
誠に残念ではありますが、大
会の継続を最優先する道を選
んだ次第です」と述べられた。
当日の入賞者は次の通り。

◆第一部 ◎入賞

- 小島由起子(睦幸陽会)
- 松浦誠月(岩戸昇陽会)
- 名和龍川(太宰府仁陽会)
- 中川礼月(太宰府仁陽会)
- 大藪晶代(太宰府奏陽会)

◎特別奨励賞

- 荒川和川(太宰府仁陽会)
- 小川紀月(笙陽会)
- 原田正月(笙陽会)

◎新人奨励賞

- 蒲原祐子(太宰府仁陽会)
- 大藪晶代(太宰府奏陽会)
- 金丸敏恵(岩戸梁陽会)

◎奨励賞

- 夏梅千月(筑紫野聡陽会)
- 蒲原祐子(太宰府仁陽会)
- 荒尾和川(太宰府仁陽会)
- 石井善川(小郡星陽会)
- 森山義川(小郡星陽会)
- 金丸敏恵(岩戸梁陽会)
- 朱雀恭月(笙陽会)

- 山崎晴月(太宰府星陽会)
- 平井幹川(太宰府星陽会)
- 植田幽川(太宰府星陽会)
- 黒岩鶴川(太宰府星陽会)
- 古賀環月(太宰府蓮陽会)
- 田中五月(岩戸扇陽会)
- 野口柳川(愛宕西陽会)
- 岡本江月(太宰府絃陽会)
- 沖 幸月(太宰府絃陽会)
- 中村美月(太宰府絃陽会)
- 中山由美子(岩戸梁陽会)
- 小川紀月(笙陽会)
- 原田正月(笙陽会)
- 芳澤佳月(笙陽会)
- 江藤雄川(北野真陽会)
- 中野香川(北野真陽会)
- 森 友川(吟友光陽会)
- 糸永純月(吟友康陽会)
- 柴田文月(吟友勸陽会)
- 原野保川(吟友勸陽会)



優秀賞受賞の皆さん



最優秀賞の
小野律峰(太宰府啓陽会)さん

- ◎特別精励賞
大藪晶代(太宰府奏陽会)
- ◎幼年入賞
池田夏音(太宰府慧陽会)

◆第二部 ◎最優秀賞

- 小野律峰(太宰府啓陽会)

◎優秀賞

- 蒲池香峰(太宰府星陽会)
- 野田美峰(岩戸扇陽会)
- 古賀箔峰(岩戸扇陽会)
- 坂本綾峰(雅陽会)
- 中垣千山(香椎晴陽会)

◎優良賞

- 中川礼月(太宰府仁陽会)
- 安枝昭山(太宰府星陽会)
- 萱嶋桃峰(太宰府星陽会)
- 原 信峰(太宰府星陽会)
- 宗 國峰(太宰府星陽会)
- 城 桜山(太宰府星陽会)
- 平井幹川(小郡星陽会)
- 植田幽川(小郡星陽会)
- 鬼塚鶴峰(岩戸扇陽会)
- 田中五川(岩戸扇陽会)
- 石塚宝峰(筑紫野観陽会)
- 松原篤峰(筑紫野観陽会)
- 首藤伸峰(岩戸佳陽会)
- 平田直峰(香椎晴陽会)
- 田中久山(香椎晴陽会)
- 田中煌峰(太宰府燦陽会)
- 中野正峰(愛宕西陽会)
- 河村光山(愛宕西陽会)
- 野口柳川(愛宕西陽会)
- 沖 幸月(太宰府絃陽会)
- 野村正峰(笙陽会)
- 芳澤佳月(笙陽会)
- 柴田徳峰(雅陽会)
- 栗須弘峰(雅陽会)
- 恵内瑞峰(雅陽会)
- 平山江山(筑紫学陽会)
- 八尋信山(筑紫学陽会)
- 山本喜久山(筑紫学陽会)
- 中川万峰(太宰府史陽会)
- 今泉鶴山(太宰府史陽会)

◎特別奨励賞

- 住田博峰(太宰府奏陽会)
- 宗 國峰(太宰府星陽会)
- 中野正峰(愛宕西陽会)
- 河村光山(愛宕西陽会)



吟士権の部優勝 野田雅峰さん

- ◆吟士権の部
- ◎吟士権
- 野田雅峰(岩戸扇陽会)
- ◎準吟士権
- 石橋舟月(吟友光陽会)
- ◎第三位
- 今村利月(大宰府啓陽会)
- ◎入賞
- 竹内恵峰(香椎晴陽会)
- 杉谷玲峰(香椎了陽会)
- 中内鶴峰(大宰府葦陽会)



特別奨励賞の皆さん



会詩吟誘導の諫山星陽副会長



範吟 蒲池勝峰



講評 野村聡陽大会会長代行

我が回からも多数の会員が参加し、入賞者も多数出た。

合吟コンクールと独吟コンクール。

福岡県吟詠剣詩舞連盟(西山啓峰理事長)第四十一回コンクール大会が、三月三十一日に、福岡市早良市民センターで開催された。

福岡県吟詠剣詩舞連盟コンクール



万歳三唱 豊福恒陽大会顧問



閉会の言葉 鳥井幸陽大会顧問

- ◎五位入賞
- 松嶋紀代子
- ◎入賞
- 小松サチヨ
- 久保山孝子
- 梁池美和子

独吟コンクール



合吟入賞 倉内恵子さん・稲毛幸栄さん・白石美恵子さん

合吟コンクール

- ◎入賞
- 倉内恵子
- 稲毛幸栄
- 白石美恵子

当日の成績は次の通り。



西山啓峰大会会長



入賞 梁池梁陽宗師範



入賞 久保山孝陽宗師範



入賞 小松扇陽宗師範



独吟五位入賞 松嶋蓮陽宗師範

九州吟連春季大会開催

福岡・筑後予選大会

九州吟剣詩舞道連盟(諫山岳陽理事長)主催、第八十二回春季競吟大会が、三月十日(日)プラム・カルコア太宰府多目的ホールで開催された。



会詩合吟
諏訪扇翠大会総務



開会の言葉の
井上雅岳先生

本会からも多数の会員が出吟し、日頃の練習の成果を堂々と発表。各部門とも多くの入賞者を輩出した。
諫山岳陽大会会長が挨拶で、「一九吟連は歴史のある連盟で、私達は大切に守ってきた。コロナ禍で、連盟会員が減少したが、私達は何とか伝統の灯を消さないように頑張っている」と話された。入賞者にして決選資格を与えられたもの

は、プラム・カルコア太宰府における決選大会(五月十二日(日))に出場する。



諫山大会会長の挨拶

◆当日の入賞者は次の通り。
◎入賞



幼少年の部入賞
池田夏音さん

◆一般の一部
◎入賞



一般の一部入賞
池田華山さん

◆一般の三部
◎入賞

- 倉内京陽師範代
- 船越薫峰(太宰府星陽会)
- 中野香川(北野真陽会)
- 沖 幸月(太宰府絃陽会)
- 杉谷玲峰(香椎了陽会)



一般の三部 入賞者

◆高年の三部
◎入賞

- 萱嶋桃峰(太宰府星陽会)
- 八尋征陽師範
- 大神靖陽師範代
- 山田啓陽宗師範
- 後藤佳陽宗師範
- 白石承峰(吟友光陽会)
- 榑崎忠陽師範
- 森永祐山(太宰府史陽会)
- 鳥飼公陽師範代
- 原 信峰(太宰府星陽会)
- 服部征山(香椎晴陽会)
- 宗 國峰(太宰府星陽会)
- 加藤督陽宗師範

◎奨励賞

- 萱嶋功峰(太宰府星陽会)
- 前田輝陽(窪陽会)
- 古賀富陽師範
- 溝口静峰(岩戸征陽会)

◆高年の二部
◎入賞

- 竹内恵峰(香椎晴陽会)
- 中垣千山(香椎晴陽会)
- 城 桜山(太宰府星陽会)
- 蒲池香峰(太宰府星陽会)
- 古賀博峰(岩戸扇陽会)
- 久我節峰(岩戸扇陽会)
- 郷原竹陽師範代
- 竹内史陽師範代
- 森本賢陽師範代
- 安永奈峰(香椎了陽会)
- 吉弘翔陽宗師範
- 安枝昭山(太宰府星陽会)
- 蒲池勝峰(太宰府星陽会)
- 梶原翠陽師範代
- 白石湊陽師範代
- 住田博峰(太宰府奏陽会)
- 土屋彩陽師範代
- 森田綾陽師範
- 榑原智陽師範代
- 小野律峰(太宰府啓陽会)
- 松岡葵陽師範代
- 平嶋和峰(太宰府星陽会)
- 柴田勘陽師範
- 福山博峰(香椎晴陽会)
- 古賀朝陽師範代
- 山口真峰(太宰府連陽会)
- 大田心陽師範代
- 上野詩陽師範代

◆和歌の部
◎入賞

- 森田綾陽師範
- 杉谷玲峰(香椎了陽会)
- 榑原智陽師範代
- 小野律峰(太宰府啓陽会)
- 松岡葵陽師範代
- 矢野重陽師範
- 柴田勘陽師範
- 上野詩陽師範代
- 久我節峰(岩戸扇陽会)
- 郷原竹陽師範代
- 武内史陽師範代
- 森本賢陽師範代
- 安枝昭山(太宰府星陽会)
- 蒲池勝峰(太宰府星陽会)
- 白石湊陽師範代
- 八尋征陽師範
- 山田啓陽宗師範
- 白石承峰(吟友光陽会)
- 榑崎忠陽師範
- 鳥飼公陽師範代
- 原 信峰(太宰府星陽会)
- 溝口静峰(岩戸征陽会)
- 倉内京陽師範代
- 沖 幸月(太宰府絃陽会)
- 萱嶋桃峰(太宰府星陽会)
- 加藤督陽宗師範



開会の言葉の原國龍先生

日本吟道奉賛会

第50回太宰府天満宮 吟剣詩舞奉納大会開催

日本吟道奉賛会福岡地方本部（野村聡陽本部長）主催第50回全国太宰府天満宮吟剣詩舞奉納大会が、去る四月十四日（日）太宰府天満宮余香殿大ホールで開催された。

大会には、日本吟道奉賛会総本部会長伊藤清洲先生をはじめ、宮城地方本部長佐藤重洲先生以下二十数名の参加を得て盛大に実施された。

大会に先立つ恒例の前夜祭には、総本部常任顧問の諫山岳陽、豊福恒陽並びに福岡地方本部役員が参加して、和やかな祝宴が催され旧交を温め合った。

十四日の大会当日は、境内の新緑が眩しく映える好天に恵まれ、爽やかな大会日和となった。

御本殿が大改修中の為、仮殿に於いて神事が執り行われお祓いに続いて、神事主宰の新西禰宜様により厳かに祝詞が奏上された。

その後、伊藤会長、野村本部長の順に玉串奉奠が行われた。



玉串奉奠風景①



玉串奉奠風景②

神事で最も大切な催しである奉納吟が行われ、参加者全員により、御祭神菅原道真公作「九月十日」の大合吟を奉納した。

神事のあと、会場を余香殿に移し、吟詠剣詩舞大会が開催された。



開会の辞の
小野雪瑠副本部長

小野雪瑠副本部長の開会の辞で幕を明け、国歌斉唱物語者への黙祷が行われた。

独吟の部では、伊藤清洲会長が、日本吟道奉賛会会詩を朗々と吟じ、来賓の宮城地方本部佐藤本部長らが続々と奉納吟を披露した。



奉納吟中の佐藤重洲先生

合吟の部でも、宮城地方本部より参加の皆様をはじめ、山口地方本部会員が次々と大合吟を奉納した。

引き続き、福岡地方本部会員の独吟と剣詩舞が奉納された。特に剣舞では大日本正義流政武館の幼少青年が、舞台上で堂々と披露、満場の観客席から大きな拍手が贈られた。



長谷知明君の剣舞



「八幡公」を舞う安倍颯志君



剣舞「兵児謡」の長谷義英さん



地吟中の平山・亀谷両先生

記念式典では、野村本部長が、歓迎の挨拶と、福岡地方本部歴代本部長名を紹介しながら50年の先人達の努力と功勞を称えた。



挨拶中の野村本部長

来賓祝辞では、太宰府天満宮新西禰宜が、俳人萩原井泉水の俳句「楠千年さら」に今年の若葉かなの一句を披露され、親への感謝、落葉を掃いてくれる人への感謝について述べられました。



祝辞を述べる新西禰宣様

又、二月十九日、皇居で行われた「歌会始め」のお題は「和」でしたが、彬子親王は、太宰府天満宮の御本殿改修に伴う仮殿に道真公の御霊が移られる模様を詠まれたエピソードを披露されました。

久保山孝陽、野村聡陽各先生が地吟者を勤め、合吟の部では、吟友会チーム、香椎中央地区チーム、岩戸チーム、太宰府チーム、男性指導者チームの大合吟に対し、盛大な拍手が贈られた。



役員剣詩舞の宮崎義都先生

続いて伊藤会長が祝辞を述べられ、能登半島地震や熊本地震及び阪神淡路大震災、更に東日本大震災の被災者へのお見舞いと弔意を伝えられました。そして、災害への備えを強調されると共に、吟詠が続けられることに感謝することを忘れないで欲しいと述べられました。



来賓祝辞中の伊藤会長

「道真公 遷られたまふ御祭りに 類にふはりと和風の吹く」



岩戸チーム「春簾雨窓」



香椎・中央区チーム「涼州詞」



吟友会チーム「二月十九日」



役員吟詠中の久保山孝陽先生

役員吟詠では、久保山孝陽、平山恵陽常任理事及び諫山岳陽総本部常任顧問が吟じ、奉納大会を締めくくった。



男性指導者「九月十日」大合吟



太宰府チーム「春日山懐古」大合吟



奉納大会記念写真

大会は亀谷鷲風副本部長兼事務局長の閉会の辞で終了し、最後は諫山常任顧問の万歳三唱で全ての予定を無事終了した。



奉納吟最終吟士の諫山常任顧問

大会終了後は「直会」に移り、大会の成功を喜び合うと共に来年の再会を誓い、解散となった。



閉会の辞を述べる亀谷副本部長

行事予定表

令和6年

6月2日(日)和歌朗詠大会

6月9日(日)天満宮林福岡大会

6月23日(日)総連九州大会(熊本)

7月7日(日)ポドリル九州山口大会

8月25日(日)天満宮杯決選大会

9月3日(火)授伝審査大会

9月29日(日)ポドリル全国大会

10月6日(日)95周年大会

11月10日(日)九吟連秋季大会

12月1日(日)総連九州大会

令和7年

1月4日(土)新年会

2月11日(火)祝九吟連筑後予選

3月20日(木)祝九吟連福岡予選

3月22日(土)毎日吟士権(1日目)

3月23日(日)毎日吟士権(2日目)

3月30日(日)毎日吟士権(北九州)

4月13日(日)吟道奉賛会

4月20日(日)春季大会

4月27日(日)九吟連決選大会

5月11日(日)毎日日本選大会

6月1日(日)和歌朗詠大会

桜 流 吟 剣 詩 舞 道 会

創 立 五 十 周 年 記 念 大 会

吟 界 朗 報

盛 大 に 開 催

去る四月二十二日(日)山口県宇部市多世代ふれあいセンター『ふれあいホール』に於いて、桜流吟剣詩舞道会(中尾桜流会長 主催)創立五十周年記念大会が盛大に開催された。

当日は、山口県内の各吟詠会及び九州各地の著名な吟詠剣詩舞界の代表らが多数招待されての節目の大会となった。

大会は、開会の辞に続いて、会員全員による「富士山」の大合吟で幕を開けた。引き続き会員吟詠が次々と発表された。



初代久芳桜流先生ご遺影



ご母堂を偲び「母の道」を吟じる桜清副会長

記念大会特別企画として、「子供体験学校」が紹介された。このコーナーでは、地方の小学校、中学校、高等学校に通う幼少青年が次々と漢詩と和歌を朗々と披露した。

これら青少年は、中尾会長が永年に亘り、実施して来た「子供伝統文化わくわく体験学校」の「詩吟」の講座で学んだ経験者で、この度の記念大会の為に特別参加されたものです。

若者らしく素直で伸び伸びとした吟詠に会場から盛大な拍手が贈られた。

県内来賓の後、記念式典が行われ、先ず、中尾大会会長が挨拶を述べられた。挨拶の中で各方面への謝辞を申し述べられた後「義母である先代久芳桜流が志半ばで倒れた跡を継ぎましたが若輩者で苦勞もありました。先代の教えである「人は財産」を守って今日まで努めて参りました。お陰様でその成果も顕われ優れた会員に恵まれて感謝しています。益々のご指導とご鞭撻をお願いします」と語られました。



子供体験学校で吟詠を学んだ幼少青年達(小学校4年生～高校3年生)



篠崎市長の祝辞

来賓祝辞では、宇部市長の篠崎圭二様が「昭和四十九年の桜流会創立以来、永年に亘り伝統文化の吟剣詩舞道の研鑽に努められ、宇部市における文化の発展と振興に多大なる貢献を頂き感謝しています。特に幼少年の健全な育成の一環として、吟詠を通して日本の伝統文化の継承にご支援とご協力を頂き心から御礼申し上げます」と述べられました。



記念式典で祝辞を述べる中尾桜流会長

式典では、会員一同より会長ご夫妻にお礼の花束が贈呈された。



祝辞中の諫山宗家

最後に挨拶に立った諫山岳陽宗家は、両吟連の天満宮杯やポリドル吟詠会の活躍に対し、謝辞を述べると共に、「令室桜清副会長の内助の功に敬意を表し更なる発展を期待した。



吟界代表祝辞の山中先生

吟界代表で祝辞を述べられた山中梅鈴先生は、「毎日吟士権大会審査員としての貢献や幼少青年成への功労が吟界で高く評価されている」と称賛されました。

県外来賓吟詠では、本会野村聡陽宗師、諫山星陽宗伝副会長らが、次々と祝吟を披露したが、圧巻は、熊本市の日本吟声流宗主山中梅鈴先生、宗



剣舞熱演中の河津先生

式典後、来賓剣詩舞があり、県内外の剣士、舞人の剣詩舞が披露された。本会諫山宗家は、大日本正義流政武館に長河津義政先生の剣舞「某楼に飲す」の地吟者を務めた。



花束を手に中尾先生ご夫妻

大会を締めくくった。声高らかに万歳三唱を行い

が披露した。記念大会の最後は、毎日新聞社城井謙治様のご発声により



日本吟声流山中先生による連吟「母」中央は山中梅鈴先生

家山中鈴鷲先生、会長山中梅鈴子先生母娘孫三代による連吟「母」の名吟でその素晴らしさに、万堂の会場から賞賛の拍手が贈られた。

露された。宮神官、巫女によるおめでたい神楽舞や八木節をバックに「ど

が盛り上がった。記念祝賀会では、琴芝八幡

会が催された。会場には、毎日吟士権主催



城井様のご発声で万歳三唱



来賓吟詠中の野村宗師

した。メインのアトラクションは、来賓、吟友有志による「大黒舞」



「大黒舞」ご一行様



どじょうすくいの名演技

崇敬会会員を募集しています 貴方も会員になりませんか？

私達は、太宰府天満宮崇敬会に入会、西日本吟詠会支部会員として、年1回の清奉奉仕活動のほか、天満宮様主催の旅行业や、崇敬会奉幣大祭に参加させて頂いています。

特に、大祭での講演会は、毎回著名な講師による素晴らしいお話を聞くことが出来、大好評です。又、会員には為になる会報や有難いお札等も配布されます。正会員と家族会員があります。

入会ご希望の方は、秘書部まで、お申し込み下さい。

亀井神道流西日本吟詠会

ホームページで紹介

ホームページアドレス

<https://kameigin.com/>



新婚当時の思い出

シリーズ 19

総師範 榎崎 忠陽

先ず、新婚前の事を少し記述します。

私は高校卒業迄は、糸島で過ごしました。卒業後、東京にあった専門学校で二年間過ごし、電気と無線工学を学びました。当時は、情報処理産業がアナログからデジタルに変換される時期でした。私もなんとかその方面の会社に入社出来ました。

妻の和子は、新潟県出身です。幼少期に父親を亡くし、美容学校に入学し、美容師として東京で働いていました。知り合ったのは、私が入社八年目でした。転勤で名古屋支店に勤務していました。

ある日、東京で勤務していた同僚の友達から、京都、奈良に旅行計画を立て、妹と叔母の家や名所旧跡を見物する予定であったが、体調を崩してしまつた。京都は叔母と一緒に行くが、奈良には行けないとの事。ついでには奈良の一日を私に同行して欲しい旨の依頼があった。妹さんが良いと言えはいいよ、と了解しました。名古屋から近鉄電車で行けば二時間足らずで行けます。待ち合わせの場所や時間をお互いに

連絡しあいました。このことが交際の始まりです。

妻と結婚したのは昭和四十四年十二月二十二日です。新婚生活はといえば、2Kの一軒家を借りて夫婦で共働きでした。蓄えは乏しいし、生活と仕事に追われる日々でした。翌年、長男が生まれました。利子は子供が二歳になると、半年程子供を連れて美容室でパートとして働きました。子供はその後、保育所に入所出来ました。生活に少し余裕が出来たのは、次男が誕生してからでした。

転勤はもう無いだろうと考えて、愛知県と岐阜県の境にある犬山城がそびえる犬山市で建売住宅を購入しました。然しながら、緊急事態発生。

昭和五十六年三月に四国高松に転勤辞令があり、家族全員で赴任しました。

これ以後、私の移動履歴が始まった。名古屋、四国、福岡、大阪、そして最後の二年間は、又名古屋と大阪。大阪と名古屋は単身赴任しました。

今は長男夫婦と同居。落ちついて生活が出来ています。昨年、和子は病で入院しています。会話は出来るので、一日を大事にして、結婚記念日である(11,22,2)(イイ、フウ、フ)でありたいと願っています。



「漢詩と諺」

シリーズ

No.18

蝸牛角上争何事

蝸牛角上何事をか争う
石火光中此の身を寄す
富に随い貧に従い
且らく歡樂せよ
口を開いて笑わざるは
是れ癡人



かたつむりの角のようなせまい場所、人々はいったい何を争っているのか、人生は、火打石からとび出す火花の様な一瞬のうちにこの身をかり住まひさせているのである。そう思えば、貧富それぞれ分相応に、とにかく喜び楽しんで過ごすべきである。くよくよと思悩んで、大口をあけて笑うこともしないのは、まったくおろかな人である。

宗伝 豊福 恒陽

桜の季節は過ぎましたが季節に合った諺を一句、ご紹介致します。

花より団子

意味は、風流や芸術よりも実利や実益を優先する立場のたとえです。見た目のよさよりも実質を選ぶこと。

花見は昔から日本で広く行われていた行楽。団子は、花見にはつきものの食物で、

室町時代末期の俳諧本、「犬筑波集」に登場することわざです。





宗師範 船木 燦陽

私は中学一年生まで、田圃の真中の二軒家に住んでいました。近所に遊び友達もなく、

妹達も小さかったので、小学生の頃から、家にある大人の本を読みあさっており、読めない漢字が出てくると、先に進めないので泣きたいくらいでした。母が読んでいた婦人雑誌や佐々木邦のユーモア小説、夏目漱石の「坊ちゃん」等。

中学の時、私が本を読んだのを見て、国語の先生が「この漢字読める？」と質問し、私が読むと「へえ、ちゃんと分って読んでるんだね」といつておられました。当り前だろうと思いましたが、中学・高校生の頃好きだったのは三島由起夫、谷崎潤一郎、長塚節など。

三島由起夫は、小説はもとより、戯曲から葉隠れの本迄、全部ハードカバーの本をそろえて読みふけておりました。

外国の作家は、ヘミングウェイ、スタインベック、ツルゲーネフ等。

しかし、としをとって行く、と、段々純文字は重たすぎてあまり読まなくなり、直木賞系の作家の小説を読むようになりました。

藤沢周平が好きになり、宮部みゆきや宇江佐まり、今は大沢在昌の「新宿鮫」シリーズにはまっています。

しかし、何冊か(この本だけは大切)という本があり、その本達は時々取り出しては夢中になつて、又読みます。その二冊が「我が北千島記」です。別所二郎蔵という人が書いた本です。

この人は戦前、千島列島最北端の占守島(シムシュトウ)に生まれて住んでいました。父佐吉は、郡司成忠大尉の千島探検の後の報効義会会員で、報効義会が北千島を撤収したのちも、一家は義会の志を守つて占守島に住みつけ、とくに冬の間は、島に生活する唯一の家族だった時が多かつたそうです。

二郎蔵氏は昭和二十年の敗戦まで同島で暮らし、島を訪れた科学者、登山家、漁業関係者など多くの人々に、独力で身につけた識見と、豊かな

個性で強い印象を与えたそうです。自分でとり寄せた専門書等で、家の中は図書館状態だったそうです。

戦後、ソヴィエト連邦による抑留生活を経て引き揚げ、ノサップ岬に近い北海道根室郊外に入植して、無物から八〇頭の乳牛を持つ牧場をきずきあげました。その合間に、この本を書き上げたのです。

一家は両親、姉三人、兄一人、弟と妹各二人、それに若い叔父(筆者は年の離れた兄と思つて

いた)と妻。全部で十一人で暮していました。兄は賢くて好奇心が強く、リーダーシップがあり、筆者の大好きな兄だったが、大人になつてから急に船員になつて島を出て行き、病氣になつて亡くなりました。姉二人は東京の親戚に預けられて、そこから嫁に行きました。だが、三番目の姉は家に帰つて来て「看護婦になる」と云つて

北海道へ行き、時々島に帰つて来ては、弟や妹達と、貝や魚や海藻をとり、遠くの浜辺へ連れて行つてくれたりしたそうです。

両親は、父は古い農家の出で、しつけはきびしかったけ

ど、食後の散歩やボート遊び、食堂の長い火鉢で十数丁のセーベイ焼きをする優しい人だったそうです。お母さんの家は幕臣の家で、何しろ二人共身体は健康、朝から晩まで働いて、子供達の着るものも縫いつけ、船乗りの人達が泊まりに来ると、何しろ野菜不足の人達だから畑の野菜ではとても足りないで、母親は野生の露を沢山塩づけにしてたくわえ、それを煮て心ゆく迄食べさせていたそうです。

子供達の勉強は、何しろ学校という物が無いのですから、自分が面白いからやる、という方法で、むずかしい本を読んだり、化学の実験をしてみたり、数学が面白そうだと思つたら代数なるものを勉強したり。幾何にとりかかつて、針と糸を使つて問題が解けると、叔父と二人で大満足という勉強法でした。

二郎蔵氏は一家だけで、島のどこへ行くのも何をとるのも自由な暮らしをしていたので、大勢の人がいる所はいやで、小学生の時二年間、千葉の学校に通つて、算数の成績が良くてほめられたそうですが、それ以外は学校には行きませんでした。それでも、その知識はすばらしく、しかも謙虚でいつか軍用馬を預つたことがあるそうです。自由はさせておくと、

馬は干草やふすまの外に、浜辺へ行つて海藻をひろつて食べていたそうです。とてもスナオでよく働く馬になつていたとのこと。

彼が亡くなる時、頭をよぎった光景は何だったろうと、よく考えます。

どこ迄もどこ迄も走つて行ける無辺際(無邊際)の浜辺や野原の光景か、嵐の後、とても食べ切れない程、岸に寄り上つた貝や魚の光景か、それとも、積雪を切り出し、水をかけて作った水晶宮か。

両親や叔父夫妻、大好きな兄や弟や姉妹も一緒に、広間を飾りつけて祝つた、お正月の光景か。

こんなに沢山の思い出を持って二二郎蔵氏は、本当に幸せな人だったと、つくづく羨ましく思います。

